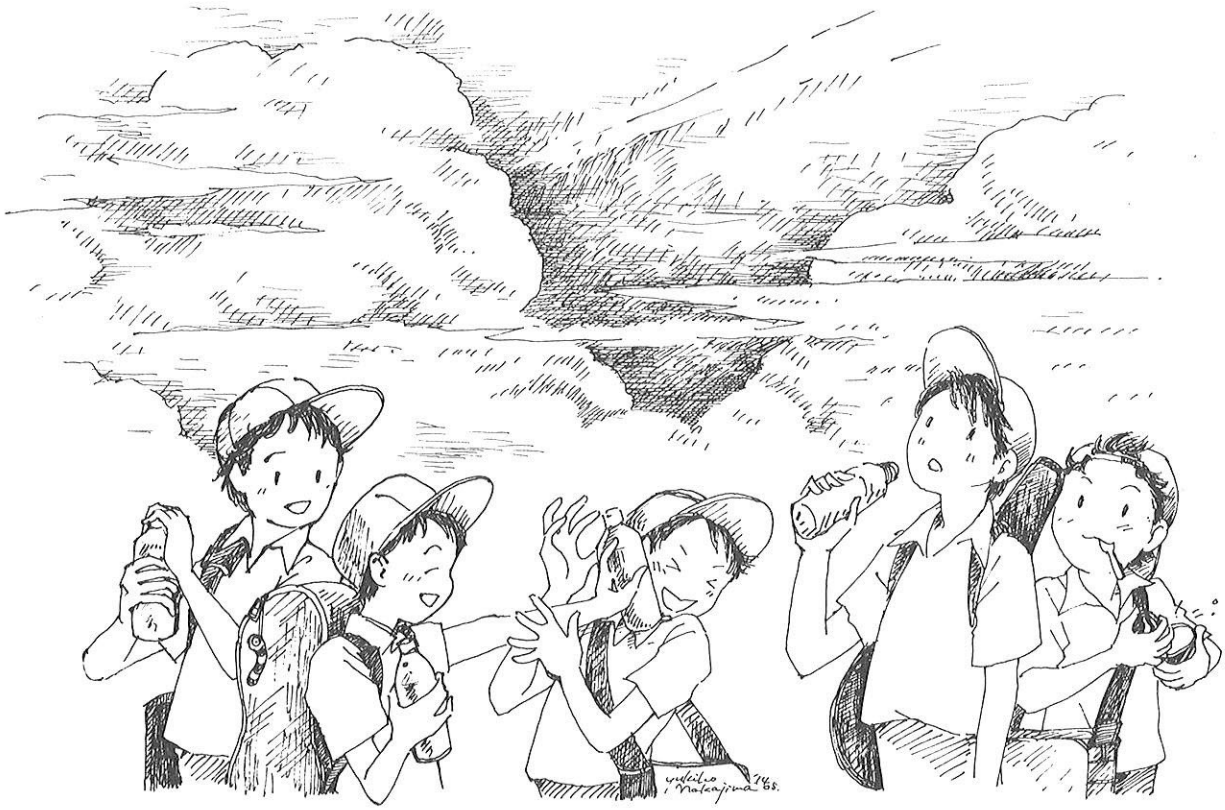
ひかりのこ

光の子

No.164　2014.7.1

●年間聖句　互いに重荷を担いなさい。（ガラテヤの信徒への手紙６章２節）



「夏がくる」　　表紙絵・中島由起子

「花行脚」

花を待つ朱の橋架けて宿場口

峡の日をのせて漂ふ花筏

呼び止めて呼び止められて花の昼

水急ぐ花咲かせては散らせては

散る花に鯉の片寄る使ひ川

鐘撞いて近江の桜散らしけり

水に添ひ月に果てたる花行脚

俳人　黛　まどか

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 加須市砂原277　印刷／プリンテング瑛和

4歳のイエス

芹沢俊介

子どもは幼いうちから、その人の本質である人間性を感受し、それを好ましいと感じることができる力がそなわっている。深いところで、大人の人間性に対するアンテナが、子どもの内部に育ち、実際にはたらいているのである。

そのアンテナが捉える対象を、おとなの発する言葉、示す行為等の根本にあるその人の「存在に対する敬意」と呼んでみる。これを人間はもちろん、動植物、すなわち生きとし生けるものへ払われている平等な感覚というふうに捉えたい。

早ければ4、5歳の年齢で、子どもはすでにそのような自分の感受性に自覚的になる場合がある。おとなの日々の言動の中に、どれだけ「存在に対する敬意」がこめられているか、子どもの感受性はかなりの程度正確に計量するようになる。そればかりか、子どもは、そのような「存在に対する敬意」をたくさんもっているおとなと、あまりもち合わせていないおとなとを区別するのである。

「存在に対する敬意」をたくさんもっているおとなを好ましいと感じ、あまりもち合わせていないおとなを遠ざけたく思う。一方を尊敬し、他方を警戒するのだ。

「淫売という言葉を吐くときの想い入れによって、自分を表白してしまう大人たちへの好ききらいを、わたしは心にきめだしていた。末広の妓(おんな)たちを慕わしくおもっているわたし自身が、大人たちへのひそかなリトマス試験紙そのものであった」(石牟礼道子『椿の海の記』)

末広とは、娼婦（売春女性）を置いて商売をする店である。この文章の主人公「わたし」は、わずか4歳の石牟礼道子である。彼女は後に『苦海浄土』を著す。石牟礼はこう言っているのだ。

同じ「淫売」という言葉を口にしても、その「言葉を吐くときの想い入れ」の中に、からだを売らざるをえない境遇に追いやられた若い女性たちへの、「存在に対する敬意」がこめられているか否かは、わたし自身というリトマス試験紙によって、明らかとなる。

そして、4歳の石牟礼道子は、このような感受性があぶりだしたおとなの「想い入れ」によって、おとなたちを好きな人と嫌いな人に分類したと述べているのである。

ここまで述べてきて思い出したことがある。ルカ伝18章に、「このような人にならなくてよかった、神よ、あなたのおかげです。」と祈りを捧げたパリサイ人の話が出てくるのだ。パリサイ人は週に2回断食し、所得の10分の1を献金している信仰篤き人たちである。

パリサイ人の言うところの「このような人」とは、取税人（ローマ帝国の手足となって働くあこぎで評判の悪い税の取立人）である。取税人はパリサイ人から、罪人（卑賤の人）、遊女、ライ病患者等と同列とみなされ、さげすみと差別の対象とされていた。

イエスは、パリサイ人により「このような人」と括られた人たちを飯に誘い、伝道の対象としたのだった。自分と同様、神の国に入る資格のある存在とみなしていたのである。

反対にイエスは、パリサイ人のような存在が心底、嫌いであった。信仰篤き自分を正しいと慢心し、自分のようにしない人、できない人を軽んじたからである。パリサイ人に「存在に対する敬意」が欠けていたのである。

幼い石牟礼道子が嫌いに分類したおとなたちは、娼婦たちを見て「このような人にならなくてよかった」という想い入れでもって「淫売」と言ったのだ。彼女にはそのことがわかったのである。このとき、4歳の幼児はイエスであった。

シリコンバレーの「恩送り」そして江戸時代の「恩送り」

老健施設みゆきの丘施設長　仙道　富士郎

前号の「光の子」で、インターネットの創設が、理想主義に燃えた米国の若者たちによってなされたことに触れ、インターネットにはその刻印が押されていることを強調した。

より具体的な話に移ろう。

皆さんは、電子メールが基本的に課金されないことを不思議に思った事はないだろうか。最近は少し安くなったが、国際電話の料金のことを考えると、インターネットを使うことのできる環境では、世界中どこでも無料で交信できるというインターネットシステムの基本設定は驚くべきことなのである。

どうしてこのようなことになったか、インターネットが開発されたそのプロセスに原因があるようである。実はインターネットは米国の軍事研究として始められたのであるが、その大目的を前提としながらも、数学好きの若者たちの手によって自由な研究が展開されていった。出来上がったシステムはすぐに学者たちによって利用され、アカデミアに広がっていき、またたく間に、それは課金なしの交信手段として世界中に広がっていった。

私が感心するのは、米国政府の懐の深さである。軍事研究といえば、当然秘密事項もたくさんあるわけで、開発された時点でインターネットの技術を秘密にしておけば、高度の軍事技術になったはずである。しかし、米国政府はこの技術を学者たちが使うことを認め、世の中にオープンにした。このことが、産業革命にもなぞらえられるIT革命を世界に巻き起こす源になったのである。

インターネットがいわば自由な羽ばたきを続けてくることができたもう一つの理由は、その開発に関わった若者たちの資質である。ハッカーというと、我が国では「コンピュータに侵入して悪事を働く人」と間違った理解が広がってしまったが、とんでもない話で、彼らこそインターネットの自由な世界を作り上げていった主役である。彼らは極めて優れた数学的な素養を持ち、コンピュータのよりよいプログラムを作り上げることに無上の生き甲斐を覚える人たちである。

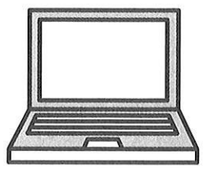
彼らのもう一つの特徴は、自分の得た知を惜しげもなく公開するそのおおらかさにある。コンピュータのプログラムは、巨万の富を生み出す可能性を持っているわけだが、彼らはそんなことにお構いなしに、得たプログラムをインターネットに公開することを介して他人に知らせる。それを基にして、別の人によってまた新しいプログラムがアップされ、プログラムは漸次改善されていく。

これは、競争原理に基づいた資本主義社会の基本を否定する新しいモラルである。こうした知を順次に伝えていく物の考え方はシリコンバレーに広く流布しており、先輩たちは、自分たちが得た知を惜しげもなく後輩に与えるという。ある時「日経ビジネスオンライン」がそのことに触れ、英語でそうしたやり方を "Pay it forwards." と表現すると紹介し、日本語で「恩返し」と訳していた。「恩返し」なら "forward" ではなくて "backward" だろうと思い、「恩返し」という訳はちょっとおかしいのではないかと編集部にコメントを書いたが、返事はなかった。

ところが、時を経て、"Pay it forwards." にぴったりの表現がなんと江戸時代に使われていたことを井上ひさしが言っているのを見つけて小躍りした。彼は（「恩送り」というのは、誰かから受けた恩を、直接その人に返すのではなく、別な人に送る。その送られた人がさらに別の人に渡す。そうして、「恩」が世の中をぐるぐる回っていく。――この「恩送り」という表現は江戸時代ふつうに使われていた。）と言っているのである（「井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室」）。

シリコンバレーの若者たちの倫理と江戸の人情の一致、なにか楽しい、豊かな気持ちに包まれた。

嗚呼ようやく「恩送り」までたどり着いた。



「共育ちカンガルー日記」

(29) 最後のドア

近藤みちる

なかよし級（特別支援学級）は、南校舎の一階の日当たりのよい場所にあって、昇降口にも一番近い教室だ。窓からは校門の大きな銀杏の木が見える。

この日、優希は少し遅刻して昇降口に到着した。足どりは重く、すんなりと教室には入れないようで、昇降口に置かれた金魚の水槽に張り付いて、動こうとしなかった。

「いいよ、お母さんはここで待ってるよ」私は静かにそう声をかけた。

優希の登校拒否が始まって、一か月近くになる。優希はなかよし級在籍だが、状況に応じて交流級（健常児との交流を目的とした普通級）との行き来が出来るようになっている。入学前、この二つのクラスをどのように併用して優希の学校生活を組み立てていくかについて検討されたのだが、幼稚園では健常児の中で支援員の配置なしにクラス活動に参加できていた実績もあったため、当面は交流級を中心に進めていくこととなった。親としても、出来る限りごく普通の学校生活を送らせてやりたかったし、優希自身もそれを望んでいるようだった。

だが幼稚園から小学校という環境の変化は、想像以上に大きかったようだ。学年の人数も一気に増え、教室も校舎も格段に広い。音や視覚の刺激が洪水のように押し寄せる普通級の教室は、優希には居心地が悪かったことだろう。その上、クラス活動や授業の展開も早い。優希は日を追うごとに疲弊し、すっかり自信を無くし、やがて登校を渋るようになっていった。

その後の調整で、なかよし級を中心に一から学校生活を立て直そうということになったのだが、その時には本格的な登校拒否に陥ってしまっていた。

ちょうど去年の同じ頃、幼稚園でも登園拒否を起こし、それを乗り越えた経験はあった。だが今の優希は、一年前の優希ではない。体も心もしっかりと成長し、意志も硬く自己主張も強くなっていた。なだめすかしは一切通用しないし、全身で抵抗されれば、引きずって連れていくことも難しい。一度だけパパが休みをとって、泣き叫ぶ優希を担いで学校へ連れて行ってみたが、廊下でパニックを起こし教室に入ることすらできず、そのまま退散するほかはなかった。もうお手上げだった。優希が自分の意志で学校に行く気になり、自分の足で歩いてくれない限り、大人たちの力ではどうにも出来ないことを、私たちは悟ったのだった。

その後、一週間ほど欠席が続いた。部屋を覗くと、優希は学習机に腰かけ、入学式で撮ったクラス写真や時間割を眺めていることが多かった。その姿に、優希が抱えている問題がどれほど深いものなのだろうかと、切なくて仕方なかった。だが、それを言葉にすることはできない優希。一番の味方であるはずの親でさえ、優希の思いを受け止め、一緒に背負ってあげることが出来ないのだ。無力な自分が歯がゆかった。

私たちが優希を学校へ行かせようと躍起になればなるほど、優希は追い詰められていく。そう気づいたとき、私はある決心をした。これからはもう二度と、嫌がる優希を無理に学校へ引っ張り出そうとはすまいと。その胸の内を聞いてあげることは出来なくても、心の声に耳を傾け続けようと。たとえ優希にしてあげられることが何も見つからなかったとしても、そばに居続けようと。

それからというもの、私は優希を急かしたり無理に背中を押すことを、一切やめた。学校を前にして、どうしても一歩を踏み出せずに苦しんでいる優希を、ひたすら待ち続けるようになった。「お母さん待っているよ。いつまででも、ここにいるよ」一言だけ告げて。

待ち続けるというのは、実に根気のいることだった。家を出て教室に到着するまでの間に、私たちはいくつものドアを開けて前へ進んでいかなければならない。玄関ドア、車のドア、昇降口、教室のドア。そのたび優希はドアを開けることをためらい、葛藤する。私はドアの向こうで、優希を待ち続ける。一時間待つこともあれば、10分で済むこともあった。だが、そうやって私たちは、毎日遅刻しながらも、なかよし級に通えるようになった。

優希はしばらく水槽を眺め、気持ちに折り合いをつけたようだった。やがて黙ってランドセルを背負い、真っ直ぐに歩き出した。そして最後のドアを開けた。教室には初夏の光と風が溢れていた。窓には茂り始めた銀杏の緑が優しく揺れ、初夏の訪れを告げていた。

暮れかねてゐる道草のランドセル
みちる

本物・ニセ物

中島　睦雄

「おれは、北大路魯山人の茶わんを持ってるんだよ。ほら、これがそうなんだ」と、友達に茶わんを見せると、みんなびっくりする。

魯山人といえば、昭和34年まで生きた超有名な人物である。文献によれば―彼の作陶は豪放さと雅趣に富み、往々古陶を凌ぐ格調を示し…―とあるように、その存在は簡単なものではない。

したがって、私が魯山人のものと言って見せた茶わんに対して、決まって「本当に本物なの？ニセ物じゃないの？」と聞き返してくるのは当然である。私が、そんな人の本物を持っている筈がないからである。

実は、魯山人の茶わんの絵柄を真似て作った安物の土産品を買ってきたものなのである。

しかし、こんなのを使って、遊び半分にお茶を飲んでいるのも、愉快なものである。

ところが、正真正銘の大家の作品を持っている友達がいる。学生時代の同級生H君である。

彼は、卒業論文だか授業の課題か何かで、レポートを作らなければならなかった時、栃木県の益子へ行った。益子といえば、第一に思い出されるのが浜田庄司氏。その偉大な陶芸作家の所へ、事もあろうに彼は、いきなり会いに行ったのであった。かなり無謀な事だったのに、浜田氏はH君の、その出身地の山形弁の訛りを少し持ち、真面目な、誠実な彼の人間性を見抜いたとみえて、非常に大事に接してくれたという。

ちょうど昼時だったらしく、あの茅葺きの風格ある浜田邸に上げてくれた。そして、上品で美しい浜田夫人と3人で、いろり端で食事したというのである。

食事は、浜田氏のイメージとしては和食だろうと思っていたら、パンを食べるのであった。蜂蜜入りのジャムで、洋風なことにH君は驚いたという。それに、磐城あたりでとれたイワシなども食べさせてくれたそうだ。奥様も、突然やって来た若者を、非常に丁重に扱ってくださり、彼は感激してしまった。

食事が済んだら、浜田氏の名作を生み出す登り窯へ案内してくれて、浜田氏の若い頃の話、メキシコへ行った時、或いはイギリスのセントアイブスでの作陶、バーナード・リーチもこの窯で修行したんだ等々、説明してくれたという。

そして、陶芸に限らず、現代の工芸の流れや論評なども語ってくれた。

そして、帰り際には「これを持っていきなさい」と、浜田氏の作になる花びんを持たせてくれたのである。

これこそ、正真正銘の本物である。

H君は今でも、あの感激的な思い出と共に、あの花びんを大切にしているという。

彼は、大学の教授の職を最後に退職し、現在はフリーである。

先日、H君と電話で話していると「むっちゃん、そのうち遊びに行くよ」と言う。

そこで私も考えた。「よおし！その時、こっちも本当の本物を見せてやろう。」と。

まさか、北大路魯山人のニセものを、本物と偽って見せる訳にはいかないから、本当の本物を見せてやろうと思ったのである。

こちらも益子のものだが、益子で6歳の頃から87歳で死ぬまで、何百何千というセトモノに絵付けをし、人間国宝にまでなった皆川マスさんという人の、文字通り本物のどびんである。

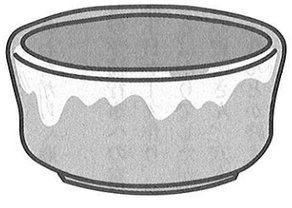
皆川マスさんは、どびんなどの作陶をしたのではない。作られた器に絵付けをし続けたのである。

おそらく、彼女が世に知られる前から私の家にあって、日常に使っていたものであろう。H君が遊びに来たら、これを使ってお茶をいれてやろうと思う。

益子での、もう一方の有名な人の手になる本物で。

「これ、本物なんだよ。ニセものじゃあないんだよ。」と。

※これは、月間武州路四八九号に掲載されたものに、加除訂正したものです。



プ・リ・ズ・ム

原田家日記

梅雨の時季に入り、毎日ジメジメした気候が続き、少し憂鬱な今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

6月7日に今年もバザーを行い、たくさんの方が来て下さいました。そして今年も聖学院大学と青山学院大学の学生がボランティアとして総勢60名ほど来て下さり、本当に助けられました。バザー物品のご協力のお願いに応えて下さった方々、ボランティアとして来て下さった方々、そしてバザーでお買い物をして下さった方々、皆様に心から感謝申し上げます。

先日、私が担当している香澄ちゃんの誕生会を行いました。光の子どもの家では、誕生会の時には子どもたちそれぞれの担当者が、食事やケーキを手作りし、その子のお友だちなどお客様を招待して"生まれてきてくれてありがとう"

"生まれてきてよかった"と感じてくれるように、盛大にお祝いします。香澄も一か月以上前から「あと○日だよね！」と毎日カウントダウンをするくらい楽しみにしていました。当日はお友だちがたくさん来てくれて、みんなでお祝いし、たくさんのプレゼントをいただき、香澄は大喜びでした。

たくさんの人に愛されていること、そして感謝の気持ちを大切に、大きく育ってほしいと思います。

岩瀬　志穂

光の中で　佐藤家

光の子どもの家では、子どもの担当保育士をできるだけかえないようにしています。でも、担当保育士の退職、休職があり、やむを得ず今年度から担当保育士がかわった子どももいます。

武田兄妹も担当保育士がかわり、私が担当することになりました。

妹の夕花はそんな中、幼稚園入園を迎えました。

一緒に幼稚園に行き、クラスに入った途端に大泣きの夕花。先生にずっと抱っこされたままでした。

入園式の会場へは、抱っこではなく、何とか歩いて入場できました。でも、その後もずーっとベソをかいたままでした。

それからは、毎朝「きょう、ようちえん行く？」と泣きながら聞いてきます。「行くよ」と答えると更に泣きます。

迎えの幼稚園バスに乗る時も大泣き。

十日ほど経つと毎朝泣くことはなくなり、次第に幼稚園バスにも泣かずに乗れるようになりました。お友だちの名前も出てくるようになり、夕花の成長を感じます。

これからも、元気に楽しく幼稚園生活を送ってほしいと願っています。

池田　祐子

子どもたちの季節　仙道家

今年度から仙道家の職員として子どもと生活を共にし、1カ月が過ぎました。この1カ月は、広宣・紀明の中学校入学式、広宣・彬・佳織の誕生会などイベントが沢山あり、あわただしく過ぎていきました。

初めての学校行事への参加、初めての誕生日ケーキ作り、料理と不安なことばかりでしたが、同じ家の職員の貴子さん、穴水さんに助けられ、なんとか終えることができました。

普段の生活でも、さりげなくごみ出しに行ってくれる広宣、食事の配ぜんや食後の後片付けを手伝ってくれる子どもたち。「これやったら貴子さんに褒められるかな」といって掃除を手伝ってくれる彬と、子どもたちに助けられながら毎日の生活を送っています。本当に感謝するばかりです。

私も子どもたちを手助けできるよう頑張っていきたいと思います。

遠藤　恵里香

季節のおとずれ　竹花家

調子が良さそうだな～と思っていても、次に顔を見るときには暗～い表情をしていたり・・・。そんな難しい時期を迎えた子どもたちが5人中4人。今年度はそんな状況の竹花家です。

唯一の小学生となった楓は、大の負けず嫌いです。ただ、何に関しても負けるのが嫌という訳ではなく、楓の相手はずっと変わらず、同じ家の冬子です。冬子は今年、中学生になりました。

家の中では一番年齢の近い2人は、必然的に一緒にいる時間が長くなります。一緒に遊んだりすることも多いのですが、その分喧嘩もしばしば。冬子からは「楓が生意気すぎる！」とクレームがあり、楓からは「冬子が先にやってきたんだもん！」の堂々巡り、水掛け論。「冬子はもう中学生になったんだから、楓が生意気言っても相手にしなければいいんだよ。」とは言うものの、姉妹のような2人にはそれが難しいこともとてもよく分かります。

お互い様な2人なので、色んな意味でお互い様をやっていけたらいいのかなと思って見ています。時には仲裁をし、時には見守る。そのいい塩梅を続けていけたら、実際の姉妹ではない2人の関係は、共に暮らしたかけがえのない関係になるのではないか。そんな期待を抱きながら、これから難しい時期に入っていく楓を見守っています。

鈴木　洋一

河のほとりで　倉澤家

4月から小学3年生になった勇は反抗的で、大人の言うことを素直に聞かず「なんで！」が口癖です。

「使った物は片付けてね！」

「なんで！」

「この計算、間違ってんじゃない？」

「なんで！」

「急がないと遅れるよ！」

「なんで！」

初めはこちらもなだめてみたり、ほめてみたり、時にはご褒美をぶら下げてみたりと努力したのですが、そのうちにイライラが始まり、お互いにとって最悪の時間となってしまいます。結局は彼が気の済むまで悪態をつき、大人がそれをやり過ごしているうちに自然に終わるのですが・・・。

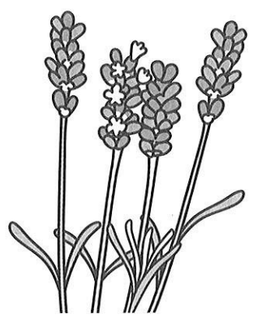
そんな勇が先日、友達のお母さまに喜んでいただけるような行動をとり、お母さまからお礼のメールが届きました。そのメールには『勇くんだけが息子の誕生日を覚えていてくれて「おめでとう」と声をかけてくれました。親としてとてもうれしかったです。ありがとう』というものでした。

光の子どもの家では、誕生日を大切にしています。「誕生日おめでとう」を誰が一番に伝えるかを競ったり、家での誕生会、そして全体の誕生会と、最低でも一人2回の誕生会を開いたり。子どもたちに生まれてきたことを後悔してほしくないという私たちの願いを込めて、生まれてきてくれてありがとう、あなたと出会えて良かったというメッセージを伝え続けています。そんな私たちの思いが勇に届いていたのでしょうか。子どもたちは反抗しながらも、実は私たちのメッセージを見聞きしてくれているのかもしれません。

彼の誕生日がもうすぐやってきます。

反抗しても悪態ついても、勇のことを応援しているよというメッセージを込めて、おめでとうを伝えたいと思っています。

倉澤　智子



養護メモ 143

養育論の試み その17

顔のない経済 1

菅原 哲男

光の子どもの家を立ち上げる頃、どのようにして子どもたちの経済感覚をはぐくむのかについて考えてきた。構内に立ち並ぶ家々に、電気、ガス、水道などのメーターをつけて、毎月それを子どもたちに明らかにしながら節約などについて考えたいと設備しようとした。しかし、水道や電気などの個別の設備には、その頃は法的な規制もあって部分的にしかできなかった。

先頃、九州に行く機会があり、長いこと親しくしてきた女性にお会いして話をしてきた。

その女性は40代後半で、シングルマザーだった。お会いする時に、子どもたちをつれてきてもらった。一緒に食事をしながら長いことこれまでの暮らしや子育てなどについてお話を聞くことが出来た。同伴の子どもたちは女子中学生で、にこやかで感じがいいものだった。

その女性の話によると、父親は生活感覚の少ない人で、女性のはたらきを当てにして借金を重ねるようになっていったという。子どもを育てるには両親がそろっている方がいいと信じていたので、別れるまでには相当耐えて我慢をし、悩み、迷ったという。残された多額の借金と子どもたちを抱え相当な困難を乗り越えてきたもののようだった。時折涙ぐみながら話してくれた。話し終えて「よかった、話をしたらさっぱりしました。」といって、互いにありがとうといって別れた。

その間、子どもたちはよく食べ、話の邪魔をしないように席を離れたり、心を遣ってくれたのだった。適切な挨拶は快くもあった。まっすぐに育っているとしみじみと感じたことだった。

金余りの社会福祉法人の様子が新聞の一面を度々にぎわし、厚生労働省は、社会福祉法人の社会貢献をプログラムして批判をかわすものようである。光の子どもの家にも応分の負担をといわれ最小の拠出をせざるを得なかった。

聞けば同業の法人でも億単位、数千万単位の内部保留があるという。

はじめに思った子どもたちの経済感覚の涵養など夢のまた夢のような状態が社会福祉法人などの施設経営状態の現実のようである。どこの国のことだろうと我が身を省みて愕然とする。繰り越しどころか、法人が爪に火をともすように節約して、乞食よろしく寄金を乞い、補填した数年分の施設会計の不足を積算したら、数千万円赤字になっているのが我が法人の実態なのだ。

社会福祉とは、困窮する者を見て素通りできないもののはたらきをなすことである。

戦後の憲法第25条の生存権保障の規定が社会福祉一般の存在根拠である。儲かるはたらきとは根拠そのものが違うのである。だから税制上も優遇されているのだ。税金などの対象そのものにならないはたらきだったのである。

困窮している者の痛みを共感し、そのために労することが社会福祉への関わりの原点なのである。困窮している者の上前をはねて内部保留するなど、営利追求の一般企業よりも醜くはないか。

このように考えてみるとサラリーマン然とした社会福祉労働者たちのありようも然りである。

社会福祉労働者は貧しくあるべきだなどと言うつもりは毛頭ない。可能な限り、手厚くするべきである。そのように考えてしてきたつもりである。

社会福祉法人は、責任を負うその施設などの運営を助け、そこで今暮らすものたちの最善の利益を最優先することが当然のはたらきである。

子どもたちの経済感覚を養う、という当初の思いの実現は非常に困難である。

前述の女性とそのお子たちの様子は、素直に育っているというものだった。光の子どもの家の子どもたちと似たような境遇である。それなのにどうしてだろうと考えてきた。

違いが思い当たったのである。それは、その女性の経済状況には、母親が必死ではたらき、借金を返しながら、肩身の狭い思いをさせまいと心遣う日常があったのである。

翻って光の子どもの家はどうか。金があろうがなかろうが必要なものは準備しそろえる。もちろんかの女性のように、肩身の狭い思いをさせないようにと心遣いながら。しかし、借金に追われ、額に汗してはたらいてこないと食えないという状況はない。はたらいて稼いでくる大人の顔が見えないのである。

福祉施設の経済は光の子どもの家においても九十数パーセントを措置費など公によっている。公には顔がないのである。

誰も痛まないで暮らしが成り立っているのである。このことは設立当初も考えの中にあった。だから、今も余り変わりはしないのだが、施設にいる子ども六名あたり一名の直接処遇職員（保育士、指導員など）が一名配置するという最低基準（これは、担当を持たない保育士や主任などの役つきや交代要員などを含む配置基準なのである）の時代から、子ども五名以下に一人配置して現在に至っている。

子どものための子どもの施設にしきっていくということは、憲法第二五条に規定されている最低限度の生活権保障を超えていなければ、果たせない課題である。

最低基準が措置費などの積算基準なのである。最低基準によって支払われる措置費を繰り越すということは最低に届かないはたらきをしているということに他ならないのである。だから公の支払金を残して恥じないことこそ恥ずべきことだと考えてきた。

子どもたちの不幸で口を糊しているわたしたちが、痛むことも、苦しむこともなく運営しているような状況をつくりたくなかったし、そうあるべきだと今も信じて養育の水準の向上に努めているものである。

子どもたちや施設を利用しなければならない人々の無念や、やりきれなさをこそ我がものにしていくはたらきを続けていく決意が社会福祉に関わる者たちのつとめであろうと心から思う。

現場から

光の子らしく

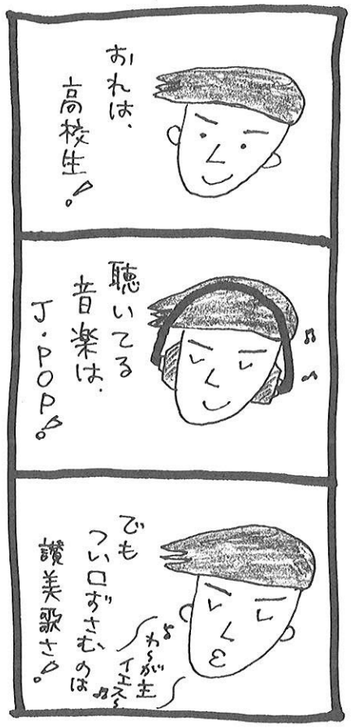
岩崎まり子

子どもたちの中には、日焼けで早くも靴下の跡が出来た子もいます。日差しの強さになえてしまう私のような者もいれば、益々エネルギッシュになる方もおいでしょう。

皆様、いかがお過ごしですか。

新年度が始まって、間もなく二ヵ月が経ちます。どの子も一つ学年が上がり、それぞれ新しい環境の中、その子なりに新しい自分として頑張ろうとしています。

丘実も一応、毎朝登校して毎夕ちゃんと帰って来ています。入学前は、それすらかなわないかもしれないと思っていたくらいだったので、万々歳というところなのでしょう。



それなのに私は今、改めて迷ったりしているのです。

丘実の興味のあることは、おしゃれと恋の話です。

「三日に一回は髪型を変えて、おしゃれしてる。」

と、新しい人間関係の中〝イケてる〟女子になろうと一生懸命なのが伝わってきます。

そして、それが高じてなのか、「授業さぼって遊びに行っちゃった。」

というようなことがあり、私としては、多くの方のご厚意で進学させて頂いているということへの感謝の気持ちは、勤勉さで表すしかないだろうと思っているところがあるので、普段から自分の快だけを押し通そうとする丘実の姿に〝これで良いのだろうか。私は大きな間違いをしているのではないだろうか……〟と焦り、落ち込んでいきます。自分のやってきたことが、無駄というよりマイナスだったのではないかと思うと、本当に自分が無能に思え、情けなくなります。

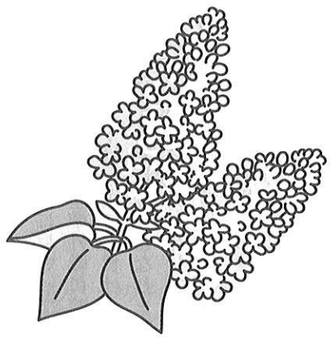
ただ一方で、自分自身の高校時代を思い出すと、丘実に偉そうなことは何も言えないような日々があり、彼女たちが青春を謳歌してはいけないという理由はないだろうとも思います。親の都合で様々な制約を受けざるを得なかった彼女たちは、もうすでに限界ギリギリまで我慢をしてきたともいえるでしょう。少しくらいのさぼりは……とも思い、そしてまた迷ってしまうのです。

人は誰しもいくつものターニングポイントを経ながら成長していくものです。丘実のその時の全てに私が立ち会うことなど不可能で、多くは、私以外の誰かがそれに関与してくれることになるのでしょう。

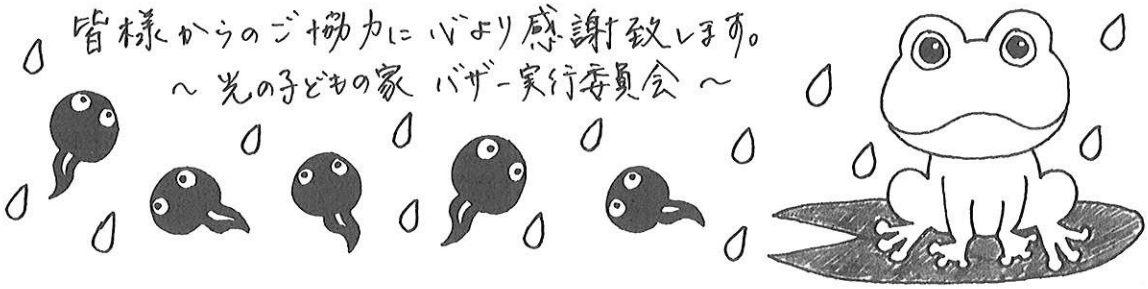
その時まで、私が出来ることというか、しなければならないことは、やはり〝居ること〟なのだろうと改めて思います。ゆるし難きを水に流し、要求されたことや尋ねられたことに誠実に応えていく。

そうして、これから彼女に訪れるであろうターニングポイントを経て、いつか自分自身で〝まあまあの人生なのではないか〟と思えるような日がくることを切に願いながら……。

周囲は色鮮やかになっていきますが、心身のバランスを崩しやすい時期が続きます。皆様、どうぞご自愛くださいますように。



おかげさまで今年度も基準外職員確保のための
「小さくても大バザー」を無事行うことができました。
当日はあいにくの雨でしたが多くの方々にお越しいただき
売上総額 400,365円となりました。
皆様からのご協力に心より感謝致します。
～光の子どもの家 バザー実行委員会～



日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2014年1月～3月

2014年1月現在
幼児4名　小学生15名　中学生9名　高校生8名　36名

1日　元旦礼拝　多数の卒園生も集まり光の子どもの家の新年を礼拝を持って始める
5日　正月気分をぶっ飛ばそう会　短い3学期に向けて準備を整える
8日　各学校始業式
13日　安田貴志記念礼拝
17日　若月健吾牧師による職員礼拝　礼拝奉仕感謝
22日　芹沢俊介氏による施設内研修　感謝
25日　光の子どもの家後援会による頑張ろう会
おいしい手打ちうどんを振る舞ってくださる　感謝

2月
5日　中学校との連絡会　主に受験を控えた子どもたちについての話し合い　感謝
14日　施設内研修としてのケースカンファレンス
星野崇啓精神科医も参加　感謝
15日　聖学院大学学生によるワーク　感謝
23日　株式会社ネクストステージより4名来訪見学
ご支援感謝

3月
1日　聖学院大学学生によるワーク　感謝
15日　第15回出発（タビダチ）の会　お世話になった多くの方々にお集まりいただき史佳の新しい一歩をお祝いする　お支え下さったたくさんの皆様に心より感謝

＜1・2・3月の物品寄贈者各位＞
星美佳　角尾弘　和泉みどり　榎本貴夫　五十嵐紀子
川真田千恵子　マルキチ物産　工藤公義　小田切未由美
小池みどり　原安男　伊達直人　リビエルコート防災委員会
金子直子　(株)カーブス　中村久美子　渋井みさ子　森公子
森美樹　奥田尚子　真田明美　天野登美子　杉山和俊
島野常一　片山和恵　ほか多数

☆たくさんのご支援ありがとうございます。本格的な夏を迎えるにあたり、皆様のご健康が守られますようにお祈りいたします。（洋一）

反射光

光の子どもの家の近くに住んでいるつがいの雉も今は子育ての真っ最中のようで、子どもの雉を連れて母親の雉がこちらまで歩いてくる様子を、子どもたちと一緒に見守っています▼おかげさまで基準外職員確保のためのバザーは、雨にも負けず四十万円を超える売り上げとなりました。バザー物品のご協力をしてくださった皆様、そして当日のボランティアの皆様、雨にも関わらずバザーにお越しくださった皆様に心より感謝申し上げます▼光の子どもの家では毎年夏にカリフォルニア大学からインターンシップ生を受け入れています。十年前に光の子どもの家で夏の二ヵ月を過ごしたトニーさんが5月にご結婚され、光の子どもの家でもお祝いパーティを催しました。この十年間、トニーさんは毎年のように光の子どもの家を訪ねてくれて、今では家族のような関係になっています▼光の子どもの家は子どものための子どもの施設としてつくられ、今もその働きを継続しています。この地で築かれていく人と人との関係は、いつも想像を超えて豊かになっていきます。祈り、支えてくださっている皆様に感謝しつつ、さらに豊かに用いられますように求めます。今後ともよろしくお願いいたします。（洋一）